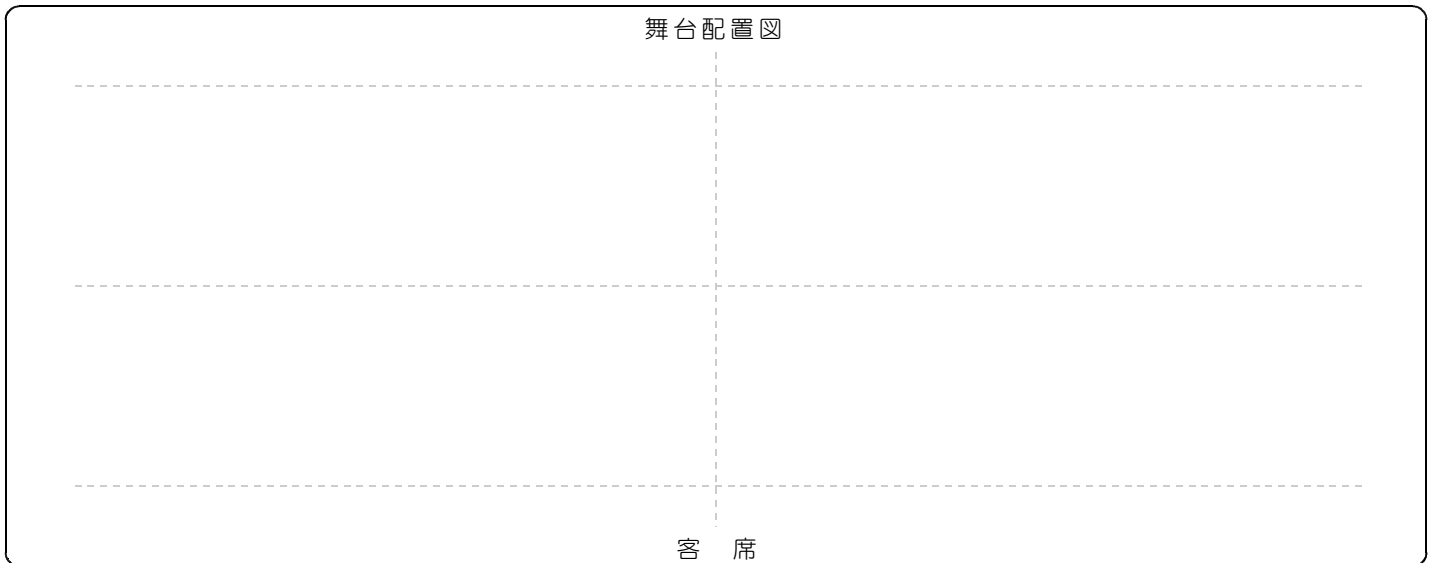


No.	鳴 き 砂 よ	演奏者数	演奏時間
-----	---------	------	------



客 席

表示記号一覧	一 箏	= 17絃	+ 三絃	0 尺八	≠ 他楽器	* マイク	□ モニター	□ 毛氈	W 屏風
立 奏	立奏台	大 台	小 台	椅子	大 台	小 台	譜面台	台	ハイター 枚
座 奏	琴台	台	見台	台	山台	録音 有：無	録画 有：無	他	
始	緞帳：暗転	板付	毛氈 緋：紺	音響					
終	緞帳：暗転	板付	屏風 金：銀	照明					

調絃表	ピッチ A=44		編成：箏							ヴァイオリン			
Part	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	為	巾
箏													G
	B°	F°	F#°	G°	C°	C#°	D	G°	G#	A°	D°	D#	E
ヴァイオリン													

編成欄には面数を記入 開始調絃は太字 転調は上下の欄 ハーモニックスは右肩に○

作曲年 1983年 委嘱者 一 構成 箏・ヴァイオリン 時間 10分 出版楽譜 無し

解説 「丹後の国、琴曳浜は、ひとはまのこらず、砂紫白にして、琴曳の砂ともいう。はなはだ清浄明白なり。この砂中を歩くに、自然として琴の音あり。雨後はひとしお調子高し。予が知れる人に琴を愛せる人あり。此處に至ってみづからこころむるに、まことにあざやかなり。十三の調子音律ともに分ると。またある人、この砂を大に求め得て、手前に敷こころむるに、會て琴の音なし」以上は、今から二百年前、近江国の名石家、木内小繁著による「雲根志」にある文章で、昨年私が三輪茂雄氏の書かれた「鳴き砂幻想」を読んだ折出会ったものです。私達、箏に慣れ親しんでいるものにとって、この文章にあるように“自然として琴の音あり”とか“琴を愛せる人あり”等のような文字にぶつかると、急に目が覚めたようになり、その文字が身体中を駆け巡り、やがてそれは深い部分に沈殿するのですが、何かの折にふっと浮びあがって、その折々の心に結びつき私情を誘うのです。例えば鳴き砂が琴を奏でるように、美しく。1983年作曲。[作曲者] 収録媒体 一